

Title

余白でなにが生じるか

読む・思う・書くのループ

Name

山本貴光

抄録

書物の余白への書き込みを「マルジナリア」という。それは読書の痕跡、つまり書物を読んだ人の感情や思考といった精神の動きの痕跡である。本稿では、マルジナリアをインクの染みとしてだけでなく、人間の営みという観点から眺めてみる。こうした検討は、デジタル環境が普及した現在、人がものを読み、考え、書くための条件を再考する手がかりになるだろう。

キーワード：書物、読書、思考、マルジナリア

Title

What you can do with margins of books

The art of reading, thinking, and writing

Name

Takamitsu Yamamoto

Abstract

If you look back on the history of reading, you may find numerous examples of “marginalia”. The word “marginalia” can be loosely described as a note written in the margins of a book. In this essay, I look at such marginalia as the traces of the work of the reader’s mind: feeling and thought. These points of view help us better understand our state of reading, thinking and writing in the digital world.

Keyword: book, marginalia, reading, thinking

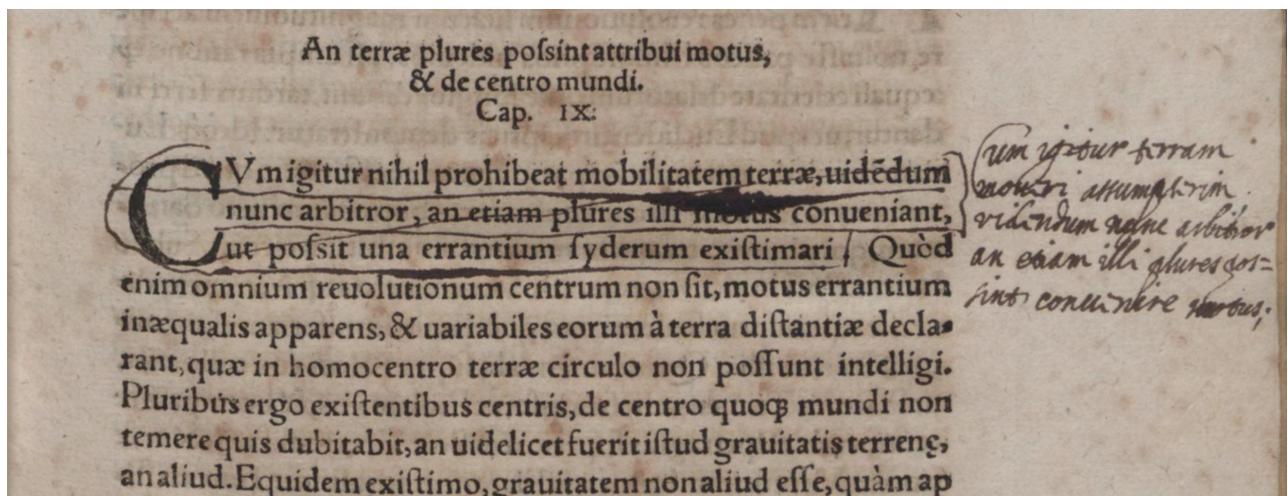
1. 余白と書き入れ

書物のページの余白への書き込みを、英語で「マルジナリア (marginalia)」という。margin の派生語で、ラテン語の margo に由来する。「縁」「境界」という意味の言葉だ。日本語でこれと似た言葉に、和書の方面で使われる「書き入れ」がある。「マルジナリア」は、いずれかといえば書物そのものに備わる余白に注意を向けた言葉だが、「書き入れ」は、余白を使う人の行いに焦点が当たっている。マルジナリアと書き入れは、互いに補完的な言葉といってもよい。余白があってこそ人は書き入れをするのであり、書き入れされてこそ、余白はただの空白ではないマルジナリアになるわけである。これを、行為（書き入れ）とその条件（余白）の関係と捉えることもできる。

ここでは、人の営みという観点から、書物とその余白について検討してみよう。

2. マルジナリアの実例

まずはあれこれ言う前に、実例を見ていただくと話が早いだろう。



これは Internet Archive で公開されているニコラウス・コペルニクス『天球回転論』のページである (Copernicus, 1566, p.7r) ¹。同書は 1543 年に最初の版が出ており、これは 1566 年の版だ。いま画像で示したのは、同書のうち、第 1 巻第 9 章「地球に複数の運動が付与されるか、および宇宙の中心について」と題されたくだりの冒頭である。コペルニクスが同書を刊行した当時のヨーロッパでは、宇宙の中心はどこかという問いに対して、地球こそがその中心であるという「地球中心説」がいわば公式見解としてあった。これに対して、コペルニクスはこの書物のなかで、「地球運動説」の可能性を論じた。いま引用した箇所は、まさにそのことに触れている。線で打ち消された箇所は次のような内容だった。

そこで地球の可動性を禁ずるものは何もないのであるから、今や見て取らるべきであると私が思うのは、複数の運動がまた地球に適合し、その結果、地球が惑星の一つと考えるかどうかである (コペルニクス, 2017, p.38)。

先の画像では、このように記された箇所を矩形で囲って、斜線によって打ち消してあり、その右の余白にラテン

語で書き入れがある。訳せばこうだろうか。

そこで地球が動いていると仮定したので、確認する必要があると思うのは、こうした複数の運動が適合するかどうかである。²

これはなにか。1616年にローマ教会は『天球回転論』を『禁書目録』に登録し、その後1620年になって修正箇所を指定した(Hilgers, 1904, pp.540-542)。このマルジナリアは、その指示と一致しており、これを書き写したと思われる。コペルニクスの記述について、地球が動くという説は「あくまでも仮説である」という文脈に置き換えるための措置だ。

この『天球回転論』へのマルジナリアは、ガリレオ・ガリレイによるものとされている。なぜ彼がこのような書き込みをしているのかについては、例えば、オーウェン・ギンガリッチ『誰も読まなかったコペルニクス』などをご覧いただくとして(同書, p.190以下)、ここではマルジナリアの話に戻ろう。

3. 行為としてのマルジナリア

さて、書物の余白に残されたマルジナリアの例を見てみた。それは過去に誰かがペンを執り、書き込んだ結果である。それはどのような過程だろうか。先ほどの例は少々込み入っているので、ここではマルジナリア一般の場合で考えてみよう。

あるとき、ある場所にある書物が置かれている。ある人物がこの書物を手にとる(あるいは大きなものであれば、机や書見台に置く)。書物を開き、ページに目を落とす。文字から文字へ、行から行へと読んでゆく。ページの端まで読み終えたら、ページを繰る。また目で文字を追う。途中でペンを手にとり(必要ならインクをつけて)、いま読んだ箇所の余白に文字を書き入れる。ペンを置いて、再びページに目を落とす。

傍目から見てとれるのはここまでだが、ここで生じているはずのことをさらに想像してみよう。

書物のページには、活版印刷や木版などによって構成された文字や図が印刷されている。白い紙に黒いインクで刷られており、日中であれば窓から入る陽光で、夜間であればランプの光があれば、そうした紙とインクのコントラストを識別できるだろう。ともあれ、ページの表面で反射した光が、これを読もうとする人物の目に入る。ここまでは光学の話だ。

目から入った光は網膜を通過して、一種の電気信号として神経のあいだを伝わり、脳へ入ってゆく。そこでなにが起きているのかについて、確たることは分からないものの、この人の脳裏では、目から入った光景が文字として、あるいは図として認識され、その文字や図からなにごとかが想起され、大まかには感情や思考や意欲と名づけられている(もののそうした語彙ではおそらく捉えきれないような)各種の精神の働きが生じる。また、ページに印刷された文字を読み終えたとなれば、次のページに進むために体を動かしてページをめくる。そしてまた読み始める。

以上は神経科学や生理学、あるいは心理学や認知科学に関わる過程で、まだ不明のことも多い。とりわけ、外から観察できる神経細胞の状態と、当人以外には直に経験できない「心」や「意識」と呼ばれる状態の関係を記述する点に困難がある。

また、ここでは省略したが、書物を読むとき、私たちは視覚だけを使うわけではない。望むと望まざるとにかか

わらず、五感も働き続けている。周囲のさまざまな音や匂い、ページに触れる手や机にもたれた腕や背から太腿部にかけて接する椅子の感触、床に触れる足の裏といった触覚、飲んでいるお茶の味なども、この読書という行為のあいまに感覚されている。だが、これらが果たしてもものを読むことにどのような影響を与えているのかはよく分からない。

では、ものを読むという行為があらましこのようなことだとして、マルジナリアに至る過程はどうか。いま述べたように、ものを読んでいると、なにかが思い浮かぶ。そのまま先を読むこともあれば、その思い浮かんだことを書き留めておきたいと感じることもある。その場合、いったん読みさして例えばペンを手にとり、メモをとることになる。書物のページとは別のもの、例えばノートなどにメモをとる場合、マルジナリアは残らない。ページの余白に向けて書くとき、ページを構成する紙にペンのインクが付着してその痕跡が残る。こうして読書を進めている当人の意識で生じたなにごとかが、言語や図に変換され、手に持ったペンの動きを介して紙の上に表現され、ここにマルジナリアと呼ばれる痕跡が残るのだった。

以上のようなことを述べたのは、マルジナリアについて検討する際、それが読者による一連の行為の結果であることを想起しておきたかったからである。いま記述した過程は、映像など、なんらかの形で記録しない限りは、ほかの行為と同様に行われるそばから消えていってしまう性質のものである。そしてページに書かれた文字や図だけが残る。

そのようにして残されたマルジナリアは、書き手の心中で生じた出来事、さらにはその人が書物をどのように読んだのかを推定する手がかりの一つとして活用できる。例えば、先ほど触れたギンガリッチの本では、16世紀半ばに印刷されたコペルニクスの『天球回転論』のうち現存するものを探して、それぞれの書き込みを調べあげ、当時の人びとがこの書物をどのように読んだのか、その背景ではなにが起きていたのかといった歴史を浮かび上がらせている。同様に、作家や思想家の蔵書に残されたマルジナリアなども、当該人物を研究する上で重要な材料となるわけである。

4. マルジナリアの分類

以上に述べたことを踏まえて、今度は余白の使われ方を検討してみよう。これまで私が目にした範囲でのことになるが、およそいくつかのパターンに分類できる。

- ① 強調
- ② 修正
- ③ 補足・注釈
- ④ 意見・感想
- ⑤ 疑問
- ⑥ 連想
- ⑦ 感情
- ⑧ 無関係のメモ

いったんこのように分けてみたが、全てのマルジナリアがこのいずれかにきれいに収まるというわけではない。

それぞれごく簡単に説明しよう。

①「強調」とは、具体的には文章へのアンダーラインや余白への線引き、「!」「?」といった印を記入しているケースである。例えば、ハンナ・アーレントやジャック・デリダの蔵書への書き込みはこのパターンが多い³。

また、中世ヨーロッパの写本でよく見かける「」(マニクル)や「N. B.」(Nota bene = 注意せよ)といった書き込みもこの類である。学校の教科書に蛍光ペンで線を引くのもこの類といえ、身に覚えのある向きも少なくないだろう。なんらかの意味で「ここを他と区別する」というための書き込みである。

②「修正」は、翻訳書のケースが分かりやすい。読者が、訳文を読みながら変だなと感じた箇所について、原文を確認する。その結果、もとの訳文が不適切であると気づいて訂正を書き込む。そのような場合である。例えば、和辻哲郎の蔵書にそうした訂正の書き込みが見られる⁴。あるいは、石井桃子は自分が翻訳した本の各版に対して、そのつど朱筆を加えているが、これは自分で自分の翻訳に修正を施すケースである⁵。また、江戸期以前に多く見られた漢籍や和書では、読者が朱筆で字を正していることも少なくない。翻訳書以外でも同様の訂正はありえる。アイザック・ニュートンやミシェル・ド・モンテーニュが自著に施した大量の書き込みはその例である⁶。

③は「補足・注釈」としてみた。これは例えば、古代から中世、あるいは初期近代のヨーロッパにおいて行われていた注釈が好例である。聖書やアリストテレスの著作を本文として、それに対する注釈を余白に書き込む。場合によっては、そうして書き込まれた注釈がのちに書物の一部として印刷されることもある。聖書のほんの数行がページの中央にちょこっと置かれて、それを囲む城壁のように注釈のテキストが配置されている写本を目にしたことがあるだろうか。あるいは、漢籍においても頭注というかたちで、本文の当該箇所についての注釈をページの天にある余白に書き入れる。これもやはり後に印刷されて引き継がれることがある。

また、検閲によって伏字で刊行された書物に対して、読者が伏字を復元している例や、ウラジーミル・ナボコフが、フランツ・カフカの『変身』冒頭に記された「巨大な毒虫」の描写から、それがどのような昆虫であるはずかをスケッチしている例なども、補足・注釈の一種と言えるだろう。読んだ内容の要約もここに含めておこう。

④は「意見・感想」である。例えば、夏目漱石は、モーパッサンの「糸くず」の余白にこう記している。

面白イ。然シ要スルニ愚作ナリ。モーパッサンハ馬鹿ニ違ナイ (山本, 2020, 口絵ページ)。

モーパッサンが馬鹿であるかどうかは価値判断であり、漱石の意見あるいは感想である。ついでながら、漱石が書くもののなかで、もっとも遠慮なくくつろいでいるように感じられるのはマルジナリアである。とは、それこそ筆者の意見なのだが。

あるいは、神谷美恵子の蔵書にも、こうした書き込みが散見される。例えば、ヴァージニア・ウルフ研究書の一節に、「ウルフが精神生活において破綻をきたさないためには不可欠のものであった」とあり、それに対して神谷美恵子は「きたした!」と抗議の書き込みをしている(大澤, 1966, p.204)⁷。この場合、②に挙げた訂正にも重なる。この「意見・感想」の書き込みは、②や③がいずれかといえ、本文をより適切な状態に整えたり、本文をよりよく理解するための注釈を添えたりするのに対して、読者自身に生じた変化を書き留めたものと言えるだろう。

⑤「疑問」は、読んで不明であることを表明する書き込みである。「？」の一文字で済まされることもあれば、「なぜそう言えるのか」といった疑問文のこともある。

⑥の「連想」は、やや曖昧に感じられるかもしれない。読んで思い浮かんだこと全般というほどのつもりである。先に述べたように読者はページに記された文字を目から入れる。その結果、脳裏でなにかが思い浮かぶ。このとき、読者は目にしたものからなにかが思い浮かぶかを、自発的・能動的に選んでいるわけではない。どちらかといえば、意図をよそに、自分の体が勝手になにかを思い浮かべてしまう、というのが実情に近いだろう。目にした言葉や図をきっかけとして、過去の経験やなんらかの知識が、つまりは記憶が喚起される。「ここに書かれていることは、以前読んだあれに似ている」というふうに。

あるいは、文字列を目に入れて意味が思い浮かぶこと自体、一種の連想の働きによると見立てることもできる。例えば、「バナナ」という文字列を目にして、その色や形や味その他を思い出すのは、過去に見たり食べたりした記憶があるからだ。「ドラゴンフルーツ」という文字列から具体的な姿形や味が想起されないとすれば、それは過去に見たり食べたりした記憶がないためだろう。また、自分が読めない言語の場合、目にしているものが文字だと推測はできても、その文字列が伝えようとしている意味が思い浮かぶことはない（それとは別に「この文字は蔓草のようだ」といった連想が働く可能性はある）。

いずれにしても、そのようにして読書をするなかで連想されたことに興味を覚えて、それを書き留めておく、ということがある。自分の心身のことながら、なぜそんなことが連想されたのかと感ずることもあれば、ツーと言えはカー式に思い出してしまうこともあるだろう。もっとも、人は連想したことをなんでも書くわけではない。なにかしらの取捨選択や意志が働いて、あるときは書き込み、あるときは書き込まない。

⑦「感情」とは、「この個所で笑ってしまった」とか「涙が出た」という印を残すような場合である。これについては、自分の例以外を知らない。私は他人の文章を読むとき、自分がどのような感情の変化を経験するのに関心があり、気がついた場合には余白に「w」（笑いの略記号）などと記す習慣がある。長いあいだ、ゲームクリエイターとして働いていたためだと思われる。ゲーム制作では、そのゲームで遊ぶ人の感情を動かすことを大きな目標としており、なにか感情の変化を引き起こすかという条件に注意が向くわけである。

⑧の「無関係のメモ」とは、たまさか手元にあった本をメモ用紙に使うような場合で、これはマルジナリアといっても、読書と連動したものではない。例えば、先ほど名前を挙げた神谷美恵子の蔵書に残る書き込みのなかには、勤めていた大学での試験についてのメモが見られる。

以上はさしあたっての分類である。振り返ってみれば、まずはものを読むことで「連想」(⑥)が生じて書き込みに至るのであり、①から⑤はそうした連想を意味の上で分類したものと捉えるのが妥当であるかもしれない。また、このように分類してみて気づいたのだが、ものを読む人の意識に生じる変化についての分類と対応するとも考えられる。

5. 余白で起きること

最後に、マルジナリアを通じて、書物の余白で起きることを改めて検討してみよう。

人が書物を読むと、心身に変化が生じる。その典型は連想である。人によっては、生じた変化のうち、なにごとかを選んで、これを言葉や図に変換して書き留める。書物の余白は、それを書き記す場所となる。

なぜ記すのか。おそらくそれは私たち人間の認知能力の限界によるのだと思われる。私たちは、自分の心身に生じるそのつどの状態や変化を、そのまま覚えておくことができない。また、たいていは覚えておく必要がないのかもしれない。だが、ものを考えたり、創り出したりしようという場合、なにかが思い浮かぶことは決定的に重要な出来事である。着想、ひらめき、思いつき、アイデア、インスピレーション、その他どう表現してもよいのだが、そうした脳裡に浮かぶことを重視したい場合、あるとき自分に訪れた思いつきを後のために捉えておきたい、ということがある。私たちの移ろいやすい記憶を頼るわけにはいかないと思えば、記録しておく必要がある。

真っ白なノートのページを眺めていても、そのようにはなりがたい。書物のように本文があつてこそ、「読む→思い浮かぶ→書く」という一連の状態変化が生じて、マルジナリアが生まれる。

ただし、余白が少ないのも困る。史上もっともよく知られたマルジナリアの一つに、17世紀の数学者ピエール・ド・フェルマーが、古代ギリシアの数学者ディオファントスの『算術（アリスメティカ）』の余白に残した書き込みがある。彼は同書に示されたある問題について、次のように書いたと伝えられている。

「私はこの問題について驚くべき証明を発見した。だが、この余白はそれを捉えるには狭すぎる」

素直に受けとれば、余白が足りなかったせいで、フェルマーの思考は流れて消えるままとなったわけで、その後、20世紀末にアンドリュー・ワイルズが証明してみせるまで、未解決問題「フェルマー予想」に留まったのだった。

また、一旦余白に記されたマルジナリアは、書物に印刷された文章や図と同じように、それを読む者の目に入る対象となる。とりわけ同じ書物を繰り返し書き込みをしながら読む場合、もともと印刷された内容だけでなく、そのつどの読書において書き込まれたマルジナリアもまた、「読む→思い浮かぶ→書く」というサイクルを生じさせる材料となる。書物とその余白は、そのような思いつきを生じさせるための装置でもあるのだ。

そのつもりで人びとが残した蔵書の余白を見てみると、かれらが書物の余白をそのような、思考や意識を遊ばせる場として使ってきた様子が目に入る。しかも書物の場合、そうしたマルジナリアと、その材料になった本文とが同じページに並んでいるため、両者の関係を推定しやすい。

そのようなこともあり、人がどのようにして思考や創作を行ってきたのかを知りたい場合、書物の使い方、とりわけ読書の痕跡が残る余白の使い方について一度はよく検討してみることに価値があると思われる。読書とは、基本的に個人的な営みであり、普段はお互いにどのように書物を読んでいるのか、余白を使っているのかは、知る機会の少ないことでもある。

加えて言えば、読み書きの道具でもあるインターネットやデジタル環境が普及した現在、マルジナリアやその条件である余白について検討することは、人間の身の丈にあった思考や想像のための物理環境について、あるいは各種ソフトウェアのインターフェイス設計を考えるための手がかりにもなるはずである。もう少し広げて言えば、それは物質と精神のあいだで生じることを捉え返す視点をも与えてくれるだろう。

¹ ニコラウス・コペルニクス『天球回転論』1566年版の第1巻第9章。画像はInternet Archiveのデータより。ガリレオ・ガリレイによるマルジナリアのある版。同書はフィレンツェ国立中央図書館所蔵のNicolai Coperni Torinensis De revolutionibus orbium coelestium, libri 6., BID:BVEE002101をデジタル化したのである。

² 書き込みは次の通り。改行はスラッシュ (/) で示した。「=」は単語中で改行が挟まることを示す記号。"Cum igitur Terram / moveri assumpserim / videndum nunc arbitror / an etiam illi plures pos= / sint convenire motus;"

³ アーレントとデリダのマルジナリアは、それぞれデジタル・アーカイブとして公開されている。アーレント：The Hannah Arendt Collection (<https://blogs.bard.edu/arendtcollection/marginalia/>) / デリダ：Derrida's Margins (<https://derridas-margins.princeton.edu/>)

⁴ 和辻哲郎の蔵書は、法政大学図書館の和辻哲郎文庫で閲覧できる。ここで触れているのは、藤岡蔵六訳述(1921)『コーエン 純粹認識の論理学』岩波書店。

⁵ 石井桃子の蔵書は、かつら文庫で閲覧できる。

⁶ 例えば、ニュートンについては、ケンブリッジ大学図書館のNewton Papers (<https://cudl.lib.cam.ac.uk/collections/newton/>) で公開されている。

⁷ ここで言及している神谷美恵子の蔵書は、長島愛生園の神谷書庫で閲覧できる。

参考文献一覧

大澤實編 (1966) 『20世紀英米文学案内 10 ヴァージニア・ウルフ』 研究社出版

ギンガリッチ、オーウェン (1992 / 2005) 『誰も読まなかったコペルニクス 科学革命をもたらした本をめぐる書誌学的冒険』 柴田裕之訳、早川書房

コペルニクス、ニコラウス (2017) 『コペルニクス天文学集成 完訳 天球回転論』 高橋憲一訳・解説、みすず書房

山本貴光 (2020) 『マルジナリアでつかまえて』 本の雑誌社

Copernicus, Nicolaus (1543/1566), *De revolutionibus orbium coelestium*. Internet Archive. <https://archive.org/details/ita-bnc-pos-0000059-001/> [accessed 31 August 2022]